

桃太郎・松江市八束町二子

令和2年9月30日

収録・解説・酒井 董美

イラスト・福本 隆男



語り手 足立チカさん（明治27年生まれ）  
 収録・昭和44年7月26日

あらすじ

昔、おじいさんとおばあさんがいた。ある日、おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行ったら川上から大きな桃が流れてきたので、拾い上げて噛んだらおいしかった。もう一つ流れてきたら、おじいさんが持つていんでやあにーと思つたら、流れてきたので、持つて帰つて戸棚へ入れておいたら、おじいさんも帰つてきた。そして、戸棚から桃を出して割ろうと、やつと割つたところ、男の赤ちやんが出た。おじいさんとおばあさんがだいに育てたげな。友だちはせつせと松葉の山に柴刈りに行くげな。桃太郎は毎日遊んでばかりいた。ある日、隣の子どもが来た。「桃太郎、山へ行かだねか」「何しに行くだ」「松葉かきにイコ（背負い具）作せ。今日はオヤコ（背負い具）作らな。やらん」。明くる日、「山へ行かや、桃太郎」「今日は二カ

ワ（背負い具）作らんならん」また明くる日「今日はワランジ（草鞋）作らんならん」「三日も待たせえか」「そんなら今日は行かか」山へ行つたら、友だちは落葉かきをするけれど、桃太郎は、日向ぼっこして、何もかき寄せようとはしない。そのうち友だちが、「桃太郎、もういなや」「荷がなあって、いなれぬわ」「ここに大きいホオタ（松の根っこ）があるが、負うていなか」というようなことになった。そこで桃太郎は松の根っこを背負つて帰つた。そうなの。「おばあさん、薪取つてもどつた」「大きくて困つたなあ」「二ワへ下ろさか」「二ワが掘れてしまあけん、いけん」「門へ下ろさか」「門もいけん」「もはや荷を下ろさかや重たていけん」。桃太郎は便所の前へ下ろしてしまつた。夜、おばあさんが便所に行くといつて桃太郎の下ろした松の根っこに引つかかして転んでしまった。揉んでもさすつても治らんげな。腰の痛いのを治すには、鬼の生き肝を取つてもどらないといけな

い、となつて、桃太郎も、「おらはどうでも鬼退治に行く」と言つた。桃太郎にキビ団子をこしらえてやつた。桃太郎がキビ団子を袋に入れて行つていたら、向こうから犬が来たげな。「桃太郎さん、どこ行くか」「鬼が島へ鬼征伐に行き、鬼の生き肝を取おに行く」「その腰のものは何だかい」「日本一のキビ団子」「一つちようだい、食うてついで行く」。一つやるとついで来た。キジ（雉）が来た。今度にはサル（猿）が来た。それらにもまた一つやつて家来にして、みんな連れで行つて鬼退治をして、鬼の生き肝を取つてもどつて、おばあさんに食べさせて、腰の痛いのを治してあげたという話だ。

解説

八束町や美保関町で聞いた桃太郎は、ちよつとした怠け者である。そんなところが人間臭い。中国や四国にはこの同類の桃太郎の話が、ときどき伝承されているのである。

（元島根大学法文学部教授）



[https://kanbenosato.com/minwa/kanchu\\_200802.html](https://kanbenosato.com/minwa/kanchu_200802.html)

